書評

酒井正三郎
『經濟體制と人間類型』

岩波書店　1953年　341頁　500圓

1

本書はその標題からも覗われるように著者の野心的な著作であり，斬新な問題提起であるということができる。資本主義と社會主義との2つの體制の能率比較，またその移行についての問題，またその中間形態的なバーナムの「經營者社會」などが詳密に研究され，これがこれらの體制を擔う企業者，經營者などのタイプと關連させらる。體制とその主體的な運營者との關係がまさに本書において著者の提起した獨自の問題だと言える。

本書は3篇から成り，第1篇は「計畫經濟における企業者，經營者の職分」，第2篇は「經濟の發展と企業者の變質」，第3篇は「計畫經濟の成立と經營者の支配」である。

先ず第1篇は資本主義對社會主義の能率比較論であるが，これを今日まであまり問題とされていない人間類型という觀點から取上げようとするのである。ここで近代資本主義の形成に重要な割役をなしているマックス・ウェーバーの「プロテスタンチズム」が問題となっておる。著者は計畫經濟としての社會主義に對する批判としてミーゼスの經濟計算論をとりあげ，その社會主義實行不能論の理由として(1)責任をもった計畫者・投機者がなければならぬということ，(2)しかし，その責任ある計畫者・投機者は必ず私的な生產手段の所有者であって，それが熱心に利潤の追及をやるのでなければ正しい計畫はできないということがあげられる。(16頁)またハイエクの「個人主義と經濟秩序」によって經濟動態の計畫化の不可能論が紹介される。これに對してランゲの試行錯誤による計畫經濟，スウェージーの反批判，さらにビーンストックの「ロシアの工業および農業における經營」によってソ連の計畫經濟の實情とその「經營者」の性格を觀察する。ここでは國家の中央機關がミーゼスの資本主義的企業者に代って計畫を行うのであるが，これは企業者の財政的責任はもたないとしても「社會的責任」をもち，決して無責任ではなく，計畫經濟の「中央主義的解決は競爭的解決よりもボトル・ネックや過剩設備の問題についてより有效な處置をとりうるであろう。「バーグソン，社會主義經濟學」(67頁)また中央機關の下に立つ社會主義企業の經營者は或る程度の自主性をもつことによってその官僚化と非能率とを防ぐことができるとする。最後に著者の問題は「經濟體制が新しい人間類型を作るか，新しい人間類型が經濟體制の變革をもたらすのであるか」(86頁)ということであるが，問題は提出されたままに殘されている。

第2篇の「經濟の發展と企業者の變質」では資本主義の發展と成熟並に社會主義體制への移行に伴う企業者の變質であり，ここで先ずシュンペーターの觀察が問題とされる。その經濟發展の理論では新結合を遂行する企業者の創造的破壞が發展の中心的動因である。企業者は必ずしも資本家たることを要せず，寧ろ概念的に兩者は分離され，また企業者の職能は指揮的な勞働として特色づける經營者職能や技術家職能とは全く異なるタイプのものである」(111頁)。しかし，シュンペーターは「資本主義・社會主義・民主々義」ににおいて資本主義はその發展成熟の故に社會主義に移行せざるをえないとする。このとき創造的破壞をその職能とする企業者の重要性は失われ，「經濟的發展は非人格化され，且つ自動化する。官廳と委員會が個人的活動にとつて代る」(124頁)のであり，官僚的經營が行われることになる。

なほ本篇ではシュンペーター理論に對してケインズ派のハンセンの停滯理論，ハロッドの動態論が紹介され，またこれらの變動理論を綜合しようとする試みとしてヒギンスの「遞增的不完全雇傭の理論」やケアーステッドの「經濟變動の理論」が相當詳細に述べられ，量的，連續的變動理論と質的，制度的變動理論との綜合が示唆されている。

2

第3篇「計畫經濟の成立と經營者の支配」では第1にバーナムの「經營者革命」がとりあげられる。バーナムは資本主義が制度的に變化しつつあることを認めるが，將來成立すると思われる社會の型は新しい資本主義でもなければ社會主義でもないのであって，それは「經營者社會」に外ならない。既に今日においても資本と經營の分離が進行し，資本家は後退して經營者が產業支配の實權を握りつつある。現代の社會革命は社會主義革命であると一般に考えられているが，バーナムによればそれは經營者革命であって，社會的運動の理想や希望にかかわらず，現實においては經營者の一團が支配する社會に歸着するというのであり，ソ連社會もこの外に出づるものではない。今日，資本主義社會においても國家が經濟に對していよいよ多く侵入することになり，政府企業が私企業に代り，また政府は新な分野の企業活動を始めつつ

ある。この國家的企業を動かすものが經營者の階級に外ならない。産業が國家の手によって營まれる社會においては，事實上，官僚と經營者との間にはっきりした區別はなく，從って新しい社會の支配階級が經營者であるということは，それが官僚であることと大差はないのである（262 頁）。この場合における民主々義の本質的な特徴は「多數の支配」ということよりも「少數に對して政治的な發言を許す機會を與える」ことに外ならない。

このバーナムの經營者社會はスウェージーによってファッシズムの一形態として批難されるもので，多分に全體主義，獨裁主義的傾向をもつものであるが，著者は右のような民主主義の立場と結びつきうるものとする。さらに著者によればバーナムの思想は「ウェーバーの通俗版」（304 頁）である。ウェーバーはマルクスに對立して制度的變動論を展開しているが，革新の原動力となるものはウェーバーにおいて「カリスマ的英雄」であり，新制度が常軌化されるときに形式的合理性としての官僚主義に固定化するのである。バーナムの經營者社會はこれを指すものとされる。著者は最後にウェーバーの制度的動態論から方法論に立歸り，ワイペルトの「用具的理論と文化的理論」を引き，結局，理論經濟學と社會經濟學との綜合を考えるのである。

3

以上本書の主題に添って概要を紹介したのであるが，著書の博い文獻渉獵とその巧みな結合とによって讀者は多くの啓發を受けるであろう。特に本書の3篇がそれぞれミーゼス，シュンペーター，バーナムの三者を主題とし，この配置によって資本家的企業者のミーゼス的役割とシュンペーター的役割，さらに資本主義の衰退に伴うシュンペーター的經營者とバーナム的經營者の出現を說く着想は高く評價さるべきものであろう。

ただ若干の批評を試みるならば第1に本書が主文獻と多くの副文獻との紹介に大部分の頁をさき，著者自身の論旨が充分に打出されていない憾を感ずることである。それは資本主義，社會主義兩體制の能率比較についても，また，社會主義社會におけるシュンペーター的經營者について，またバーナムの考察が果して妥當であるかなどについて，もっと著者の明確な見解が出されて欲しいと思う。第2に本書における著者のモーチヴが幾つかに分裂しているために論旨の一貫性が缺けていることである。主たるモーチヴは經濟體制と人間類型にあるが，これが必ずしも2つの經濟體制の能率比較とぴったりしないが，さらに經濟體制の變動理論の方法論的考察とも充分に融合していない。本書の中にはケアーステッドの變動理論が第2篇の重要な部分を占め，また第3篇の結論的部分はワイペルトの方法論によって結ばれており，著者が如何に經濟變動の方法論に深い關心を寄せているかが覗われる。從って本書では經濟學における分析的抽象理論と歴史的制度理論とを如何に綜合するかということが大きなモーチヴとして浮び出ており，人間類型的モーチヴとからみ合わされてはいるが融合していない憾みがある。むしろこれは2つの別個の問題として，方法論と對象論とを2つの論文に分つべきではなかったかと思われる。

第3に著者はバーナムの思想をウェーバーの通俗版というのであるが，ウェーバーと近似するものはむしろシュンペーターではなかろうか，革新的企業者の衰退をうけて現われる管理的經營者がウェーバーの機械化され非人格化された官僚組織に當るものであろう。バーナムの經營者は，レーニズム，ファッシズム，またニュー・ディール主義などの中にあって資本主義の革新を行い，その支配權を奪取しようとする指導者階級の一團であると思われる。もちろんこの經營者もやがては化石となるかも知れないが，この過渡期においては大きな社會的運動を操りつつ制度を革新し，その實權を掌握する新鋭の分子を指しているように思われる。最後に著者が第1篇の最後に殘した問題，人が制度を作るか或は制度が人を作るかについての著者の思索の成果を他日に期待したい。

（赤松　要）

守屋典郎
『恐慌と軍事經濟』

青木書店　1953 年　357 頁　450 圓

第二次大戰後，資本主義各國で經濟發展の起動力となったのは，「防衛生産」の名でおしすすめられた軍事經濟である。この經濟の軍事化こそが，同時にまた現代資本主義の幾多の矛盾や困難の根源を形づくってきた。したがって生活狀態の改善を求める運動は，「軍需産業の平和産業への切かえ」という目標をかかげ，とくに朝鮮休戰問題の好轉後の軍事的再編成＝合理化恐慌を契機として，この目標のもとにますます廣汎な國民運動が結集されようとしている。このようにして，今われわれは，戰爭經濟か平和經濟かという問題に否應なく直面せざるをえなくなった。守屋氏の著書は，十數年前から書きためられた諸論文の改筆・集成であるけれども，この現代的なテーマに捧げられた最初の體系的研究だという意味で，大きな關心をあつめているわけである。本書の前半（第1・2章），『資本論』にそくした「恐慌の基礎理論」の部分もそれ自體としては問題に富んでいるが，ここで